

## 偉電史探訪06

大型火力発電所が都内に普通にあった牧歌的時代  
お化け煙突の千住火力発電所はその最後のスター

煙突からもくもく黒煙の上る風景が経済成長の象徴だった時代がつい最近まであった

今回ご紹介するのは、昨年2月に本誌の別企画で扱った「旧千住火力発電所跡」の再訪記だ。

旧千住火力発電所が稼働を開始したのは1926（大正15）年1月。1963（昭和38）年5月まで足掛け38年間にわたり稼働し、翌1964（昭和39）年8月に解体された。

つまり、戦時体制の頃の東京から、前回の1964東京五輪が開催される直前までの高度経済成長時代前半期の東京の電力を、中核的に賄っていた発電所の一つだ。

旧千住火力発電所が立地していたのは足立区千住桜木町の荒川沿い。写真は荒川の対岸から撮影したワンショットだ。もちろん解体されたのが半世紀以上も前のこととて、荒川越しに遠望しても、面影はまったく見当たらない。だが、写真・左端の建物（帝京科学大学）から、写真・右端の鉄塔（TEPCOの通信用鉄塔）に至るまでの広大なエリアが、まるまる千住火力発電所の敷地だった。

近くまで行けば、旧千住火力発

電所の名物「お化け煙突」の実物を輪切りにしたモニュメントがあったり、お化け煙突を模したモニュメントもある。けれども今回は荒川の対岸から、旧千住火力発電所があった場所を遠望したかったのだ。

ちなみに旧千住火力発電所名物の「お化け煙突」とは、実際には4本あった煙突（高さ約80m）が見る角度によって3本に見えたり、時には1本に見えたりしたため、だという。

今回、荒川の対岸から旧千住火力発電所の跡地を遠望したいとおもったのも、そんな素朴な視覚的マジックが東京の名所になる時代に想いをはせたかったからに他ならない。

旧千住火力発電所が解体された後、千住火力発電所が担っていた発電事業は、豊洲に立地する新東京火力発電所などが継承したが、その新東京火力発電所も2000（平成12）年に廃止。発電所の歴史は、まさに偉電史を支える大きな潮流を成している。（砂耳）